

## 在独彝語文献調査報告<sup>1</sup>

岩佐一枝

名古屋外国語大学

キーワード：彝語文献、撒尼彝語方言、彝文字

### 1 はじめに

彝語（イゴ；別名ロロ語。Yi, Lolo とも）は、チベット・ビルマ語派ロロ・ビルマ語支を構成する主要言語の一つであり、中国西南部の四川省、雲南省、貴州省及び広西壮族自治区、並びにベトナム、ラオスの北部一帯で現在も使用されている。彝語は、独自の文字体系と豊富な文献を持つことでもよく知られている。

中国国内の彝語は、北部、南部、東部、西部、中部、東南部の 6 方言に、ベトナム国内の彝語は花ロロと黒ロロの 2 方言に分類されている一方、ラオスには 1 方言のみが分布している。現代方言の多くは漢語やベトナム語の影響を受け、消滅の危機に瀕しているが、文献に関しても、これを扱う祭司の高齢化と後継者問題を含め、解決すべき多くの問題を抱えている。

上記の彝語方言のうち、文字と文献を有するのは、中国国内の彝語 4 方言—北部、南部、東部、東南部—のみである。なお、本報告は、彝族の使用言語の言語学的分類について議論するのが目的ではないため、便宜上、中国国内の公的な分類に従い、各文献に書かれている彝語の同定結果、つまり所属方言を示す。

彝語は、元・明代にはすでに成立していたと推察される彝文（イブン）あるいは爨文（サンブン）と呼ばれる独自の文字体系と、それによって書かれた多数の文献を持つ。文献の内容は、経典、歴史、暦、占ト、神話、医学など多岐にわたるが、これらの文献と彝文字は「ピモ」と呼ばれる祭司が代々受け継いできた。

彝文字は方言毎にはもちろん、同一方言区域内においても各村毎に、文字数や字体に大きな差異が存在し<sup>2</sup>、文献のフォーマットもまた文字同様、地域によって様々な形式を呈する。このような多彩な様相を示す彝語文献は、中国国内のみならず、イギリス、フランス、

---

<sup>1</sup> 特に注記がない場合、本稿で示すベルリン州立図書館の彝語文献に関するデータは、筆者自身が収集した内容に基づいている。なお、ドイツでの彝語文献調査は、日本学術振興会（特別研究員奨励費）「言語変化メカニズム解明の試み—彝語文献言語と現代方言のコーパス作成をもとに—」（課題番号：15J40040）の助成を受けている。

<sup>2</sup> 方言区域ごとの彝文字及びその異体字の分布と分析については、Iwasa (2018a)を参照されたい。

ドイツといったヨーロッパ諸国の図書館や博物館などにも所蔵されており、その総数は 100 巻以上にも上る。

本稿は、これら在欧の彝語文献のうち、筆者が 2015 年 12 月から翌年 1 月にかけてドイツ・ベルリンのベルリン州立図書館で行った調査内容に基づき、これまでほとんど報告がなされてこなかった在独彝語文献についてその概要を示すことを主目的とする。

## 2 在独文献に関する基本情報

### 2.1 文献調査について

文献所蔵先：ドイツ、ベルリン：ベルリン州立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin) ,  
Collection of Francis Rock<sup>3</sup>

### 2.2 先行研究

1977 年及び 1980 年に Klaus Janert によって、ベルリン州立図書館所蔵のマイクロフィルムの画像をもとに、納西や仲家<sup>4</sup>文献とともに 3 巻の彝語文献全頁が掲載されたカタログが刊行されている。

Janert, Klaus. 1977. *Hachi-Handschriften nebst Lolo- und Chungchia-Handschriften*. Teil 4. *Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland*. Wiesbaden. Franz Steiner Verlag GmbH.

Janert, Klaus Ludwig. 1980. *Nachi-Handschriften nebst Lolo-Handschriften*. Teil 5. *Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland*. Wiesbaden. Franz Steiner Verlag GmbH.

---

<sup>3</sup> Janert (1977, 1980)に掲載されている 3 文献は、彼の記述からも Collection of Rock に含まれるのは間違いない。しかし一方、筆者の調査で新たにその存在が確認された文献については、当図書館では“Collection of Rock”の括りで扱われてはいたものの、その登録時期を考慮すると、元々 Rock (Rock, Joseph F., 1884-1962)が持ち込んだものとは考えにくい。なお、Rock はナシ語の研究とその文献の収集でよく知られる。

<sup>4</sup> 従来、仲家 (独 Chungchia, 仏 Choung-chia) 族と呼ばれていた民族 (現在の中国における布依 (ブイ) 族; なお「布依」は自称) は文字や文献を持たないと言われていたことから、筆者は、Janert (1977)において仲家と分類されている文献 Hs. Or. 687 は、文字や文献の体裁から、少なくとも仲家文献ではなく、実際のところ水書ではないかと推測していた。しかしながら、近年仲家族 (布依族) も文字を持っていた (る) との情報を得たことから、その同定に関しては専門家による検証結果を待ちたい。なお、フランス国立図書館で Choung-chia に分類されていた文献は、彝語東部方言の文献であると筆者は考える。これについては、稿を改めて検証したい。また、布依族とその言語については以下のサイト内のブイ語の記事に詳しい。 <http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/>

これらは世界的にも比較的早い段階で公刊された彝語文献のオリジナル資料であり、特にヨーロッパ所蔵の彝語文献に関しては初めてのものである。その点で、本資料は極めて貴重な資料といえるのだが、ここに収録されている画像には少なからず問題がある。単に文献の天地が逆である程度なら良いのだが、掲載されている多くの頁が文献の裏側であり、鏡文字の状態なのである。まさにこの一点のみ悔やまれる。

### 3 所蔵文献詳細

先の Janert の資料をもとに、筆者が 2015 年 12 月から翌年 1 月にかけてベルリン州立図書館で彝語文献の調査をした結果、カタログに掲載されている 3 点に加え、カタログ未収録の彝語文献 1 点、計 4 点の彝語文献が存在することが明らかになった。ベルリン州立図書館での Shelfmark は以下の通り。なお、Lolo1-3 は Janert (1977, 1980)における表記である。

Hs. Or. 688 : Lolo1, Janert (1977)に収録。

Hs. Or. 689 : Lolo2, Janert (1980)に収録。

Hs. or. 10695 : Lolo3, Janert (1980)に収録<sup>5</sup>。

Hs. Or. 13458, Janert の資料には未収録。筆者調査時にその存在が明らかとなった。

以下、それぞれの書誌情報を提示する。

#### 3.1 Hs. Or. 688

筆者調査時には、Hs. Or. 688 は損傷が激しい<sup>6</sup>とのことで、現物を見ることが出来なかった。そういった意味でも、Janert が先述のカタログを早い段階で刊行した功績は計り知れない。ここでは Janert (1977: 825)に基づき、本文献の書誌情報<sup>7</sup>を記す。

なお、Janert (1977)は、本文献に書かれている彝語がどの方言に属すものか言及していないが、筆者は、その文字や文献の形式から、中国国内の北部方言（ノス彝語、Nuosu Yi とも。本稿では以下ノス彝語とする。）であると判断した。

---

<sup>5</sup> Janert (1980)では、Hs. or. XXX と記載されているが、筆者が調査した際、その Shelfmark は Hs. or. 10695 であった。また、Janert (1980)では、なぜかこの彝語文献だけ Hs. or.のように、他の文献に置いている“Or”と書かれているところが、“or”のように“o”も小文字で書かれている。

<sup>6</sup> 実際に Janert (1980: 1187)において、Hs. Or. 688 は「Hs. Or. 689 よりも保存状態が悪い。」との記述がある。

<sup>7</sup> 損傷についても「亀裂がある」あるいは「擦り切れている。おそらく使用による摩耗。」等の詳細な記述があり、その具体的な場所や修復の状態も含め詳細に記録されているが、紙面の関係上ここでは割愛する。

Shelfmark: Hs. Or. 688

方言：北部方言（ノス彝語）

体裁：目の粗いボール紙製の約 30cm の長さの紙筒の中に、棒に巻き付けられた巻物が入っている。各ページの画像は Janert (1977:767-774) に掲載されている。

18 枚。紙の左上に 6cm ほど突き出した約 28.5cm の竹の棒が、青色の糸で約 4cm 間隔で 6 箇所しっかりと紙に縫い付けられている。

なお、テキストは 17 枚目の 10 行目で終了し、18 枚目は白紙。

文献の素材は、柔らかく、極めて薄い紙。一部フェルト状になった部分有り。片面にのみ文字が書かれている。

文献サイズは、幅 22.5cm、用紙の最下部が存在していないため、元々の長さは不明だが、最短箇所 6cm、最長箇所 33cm。

### 3.2 Hs. Or. 689

本文献に関する書誌情報は、Janert (1980) 並びに筆者の調査データに基づいている。

Shelfmark: Hs. Or. 689

方言：北部方言（ノス彝語）

体裁：Hs. Or. 688 同様、約 30cm のボール紙製の紙筒に入っている。紙筒の体裁は Janert (1977) における Hs. Or. 688 とほぼ同じであるが、筆者が調査した際には、筒の底は黒い布テープで、蓋の方はベージュの紙テープで貼り付けてあった。

文献サイズは、縦 25cm, 横 28cm。紙は透ける程薄く、黄色い。

21 枚、21 頁。片面にのみ文字が書かれている。紙を撚り合わせて作った紐で左側は大きく 2 ステッチで綴じられている。また、この紙紐は左上部で玉結びされている。ところどころ、四角で囲んだ章のタイトルらしきものが散見される。

一枚目の右上にロックコレクション内の番号“2”が黒インクで書かれている。

ちなみに、本文献の損傷については、Janert (1980: 1187) に詳しい。

なお、Janert (1980: 1157-1167) で文献の各ページを確認できるが、文献の偶数ページ<sup>8</sup>はすべて裏側が掲載されているので、注意が必要である。そもそもこの大きな

---

<sup>8</sup>つまり Blatt 2, 4, 6, ...20 まで。

ミスは、おそらくこの文献の綴じ方に起因すると思われる。この文献は、長い紙を二つ折りにしたものを複数組、先述の紙紐で綴じ合わせたと推測するが、長年の使用による摩耗で、その袋状の部分が切れてバラバラになったと考えられる<sup>9</sup>。これにより、文献のページの表同士、裏同士が向かい合わせになるという、変則的な形式となってしまった。更には、文献の紙自体極めて薄いこともこのミスに拍車をかけたに相違なからう。特に彝文字が読めない場合、よほど注意深く見ていなければ、どちらがページの表側なのか判別が難しかったと思われる。その結果、Janert (1980)に収録されている文献画像は、本文献及び Hs. or. 10695)共に、1 ページごとに裏側が掲載されており、鏡文字状態となっている。

### 3.3 Hs. or. 10695<sup>10</sup>

本文献に関する書誌情報は、Janert (1980)並びに筆者の調査データに基づいている。

Shelfmark: Hs. Or. 10695

方言：北部方言（ノス彝語）

体裁：ロックコレクションの一つ。

Janert (1980: 1188)によれば、この文献は、Rock によって“Lolo Ms.”と書かれた白い紙に包まれており、その紙の裏側には「1923 年、Weihsi から Salwin の Atuntzu への旅」と書かれていたという<sup>11</sup>。

なお、Janert (1980: 1169-1183)における文献のページ順序は誤りで、本来、1 ページ目 (Blatt 1)とされているものが最終ページであると筆者は推察する。それは、ノス彝語の文献の大半においては、文字は通常左から書かれることによる。ただし、最終的判断には、更なる解読と内容の精査が不可欠であることは言うまでもない。

---

<sup>9</sup> 彝語文献には、実際このような体裁のものが少なからず存在する。筆者は当初、このような文献について、なぜこのような風変わりな綴じ方をする必要があったのかと疑問を抱いていた。ところがある時、同様のページの並び方をした文献のうち、数ページの端が袋とじ状になっており、またその部分が擦り切れかけている状態にあるものを発見した。このことから、このタイプの文献は、本来二つ折りにした紙を綴じて作られたものであり、長年の使用によって袋状の端が摩耗し、切れてバラバラになってしまった結果であるとの結論に至った。

<sup>10</sup> 注 5 参照のこと。

<sup>11</sup> 筆者は未見。筆者調査時には Hs. Or. 688, 689 同様、約 30cm のボール紙製の紙筒に入っており、特に紙で包まれてはいなかった。なお、鈴木博之氏より「Weihsi は維西、Atuntzu は阿墩子であろう。そうであるならば、Salwin は Mekong の誤りである可能性が高い。」とのコメントを頂いた。ここに感謝申し上げます。

文献サイズは縦 24.5cm、横 25.5cm。34 枚、34 ページ。紙は淡いベージュで、非常に薄い。

一方の端に細い紐がついた縦 21cm、横 29cm の濃紺の目の粗い綿布で包まれている<sup>12</sup>。よって、綿布よりも文献の方が縦に若干長いため、巻くと文献の上下が少しはみ出した状態になる。

本文献は、火箸状に先を二つに裂いた、長さ 28cm、幅 0.5cm の竹の棒に、二つ折りにした紙をその真中部分で挟み込んだのち、糸でかがって綴じてある。

1 枚目及び 3 枚目は空白。4 枚目以降は、8 枚目、17 枚目及び 34 枚目を除き、4 枚目と 5 枚目以後 32 枚目と 33 枚目まで、それぞれ文字の書かれた面同士が向かい合わせになっている。紙が極めて薄いことに加え、このような変則的なページ配列によってか、Hs. Or. 689 同様、Janert (1980:1168-1183)において、全ての偶数ページ<sup>13</sup>が文献裏側の画像となっている。

ところどころ、四角で囲んだ章のタイトルらしきものが散見される。

### 3.4 Hs. Or. 13458

本文献は、Janert (1977, 1980)においても、またそれ以外の先行研究においても、全く言及されておらず、筆者の調査で初めてその存在が明らかとなった。よって、本文献に関する記述は、全て筆者の調査データに基づいている。

文献 2 ページ目の中央部分には、“or. 1999 - 13458”との記述があり、ベルリン州立図書館の印が押されている。この記述から、本文献が当該図書館へ登録されたのは、1999 年であると推測される。

本文献は、彝語東南部方言の下位方言の一つである宜良下位方言（本稿では以下サニ彝語と呼ぶ。）で書かれている。在欧彝語文献において、サニ彝語文献は極めて珍しく、筆者の知る限りでは、現在これ以外には大英図書館に一巻所蔵されているのみである<sup>14</sup>。

Shelfmark: Hs. Or. 13458

方言：東南部方言・宜良下位方言（サニ彝語）

体裁：文献サイズは縦 26cm、横 20cm。40 枚 44 頁。

ページ左側を紐でかがって綴じてある。

紙質は粗く、比較的薄いものである。

---

<sup>12</sup> こちらの綿布は、筆者調査時に確認。

<sup>13</sup> Blatt 2, 4, 6, ...30 及び 33。

<sup>14</sup> 詳細については Iwasa (2004)を参照されたい。

文字は左から右へ、上から下へ書かれている。文字は基本的に墨で書かれているが、赤色で書かれている箇所もある。筆記具は、筆或いは竹ペンのようなものと推測されるが、詳細は不明。

序文以外は、一句が全て 5 文字からなる詩の形式で書かれている。句読点はない。

1 ページ目と 2 ページ目は、2 枚の紙が糊付けされているため、他のページよりかなり厚みがあり、丈夫である。1 ページ目には、約 1.5cm x 1.5cm のマスが赤線で書かれている。横 11 マス x 縦 16 マス。それ以降は赤色で罫線が引いてあり、各ページ平均 10 行程度。同様に赤線で以て、1 ページ 3 段に分けられているが、文字はしばしばその区切りを無視して書かれている。

また、36 ページ目は、一枚の紙の両面に別の紙が貼り付けられており、裏側には赤色でマス目が書かれている。

39 ページには 3 行、40 ページには 4 行、筆で漢語が墨書きされている。39 ページのみ、他のページとは天地が逆になっている。

作成年代：最初のページの内容から、1934 年 1 月 12 日に書かれたことが判明<sup>15</sup>。

出所：この文献は、現在の中国雲南省昆明市石林彝族自治县圭山镇维则村のピモによって書かれた可能性が極めて高いことが判明した。

Iwasa (2018)によれば、39 及び 40 ページの漢語の文章中に登場する「徐」という姓が本文献の出所を明らかにする上で、大きな鍵となった。撒尼の人々の間にこの「徐」姓を持つ家系は存在せず、漢族に特有の姓であった。そして、この姓を持つ漢族が居住していたのは維則村に限られていたことから、本文献はこの地で書かれたと強く推定される。

内容：筆者は、Iwasa (2018)の中で当該文献が文芸作品である可能性を指摘したものの、その後更なる解説・分析の結果、Iwasa (2020)では、安定した土地を見つけ、理想的な家を建てるための指針及び方法を説いた経典の一種であろうとの見解を示した。

#### 4 まとめと今後の課題

本稿では、これまでほとんど取り上げられることのなかった在独彝語文献について、その基本的情報を提供した。

ドイツにおける彝語文献は、同様にこれを有する他のヨーロッパ諸国<sup>16</sup>に比べ、数の上では圧倒的に少数であるものの、Hs. Or. 13458 を除く 3 巻について、Janert により詳細な記録

---

<sup>15</sup> 詳細は Iwasa (2020)を参照されたい。

と文献の全ページが公開されている点で、彝語文献並びに彝語文語研究への貢献度は群を抜いている。

しかしながら、残念なことに、こうして文献の全ページが公開されているにも関わらず、その解読作業、並びに言語学的分析は殆どなされてこなかった。そこで、筆者は 2015 年から在独彝語文献の調査及び解読作業に着手した。その結果、筆者は 2015 年のベルリン州立図書館における初めての調査で、これまでその存在を知られていなかった彝語文献 Hs. Or. 13458 を確認し、文献のフォーマットや語彙、字体などから、当文献に書かれている言語がサニ彝語であると結論づけた。

この調査以降現在まで、ピモを含めたサニ彝語のインフォーマントとともに継続的に解読に取り組んでいるが、極めて個人的な文字体系である彝文字の特性に加え、現代ではすでに使用されなくなってしまった道具や語彙が多く含まれていることから、その作業は難航を極めている。現在、解読は半分程度まで進んでおり、その成果については稿を改めて提示したい。

ピモの高齢化と後継者不足は深刻であり、それ故、知識豊富なピモを見つけ、彼らと強固な協力体制を構築していくことは決して容易なことではないが、今後も在独サニ彝語文献だけでなく、ノス彝語文献の解読作業も進め、彝語研究にデータを提供していくことを今後の重要課題の一つとしたい。

## 参考文献

- Iwasa, Kazue (2004) “Axi and Azha - Descriptive, Comparative, and Sociolinguistic Analysis of Two Lolo Dialects in China-”. PhD Dissertation. Kobe City University of Foreign Studies.
- (2018a) “Current studies and future perspectives on the Yi manuscripts preserved in Europe – the case of Hs. Or. 13458 of Staatsbibliothek zu Berlin -”. Paper presented at the International Symposium of Ancient Texts and Languages of the Ethnic Groups along the Silk Road. 7<sup>th</sup> November 2018. Georg-August-Universität Göttingen. Göttingen, Germany.
- (2018b) *Remarks on Maps of the Yi Script Based on the Swadesh 100 Wordlist. Studies in Asian Geolinguistics, Monograph Series No.5.* Report of ILCAA Joint Research Project 2016-2017 “Studies in Asian Geolinguistics”. Tokyo. Research Institute for Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.

---

<sup>16</sup> 現在までに彝語文献を所蔵していることが明らかになっているのは、イギリス並びにフランスで、両国合わせて、100 巻以上の文献が複数の機関に所蔵されている。なお、ロシアにも彝語文献が所蔵されているといった情報もあるが、現在までのところ未確認である。



———— (2020) “Geolinguistic Approach to the Analysis of Yi characters and its current findings”. Paper presented at the Recent Advances in Yi Studies. 11<sup>th</sup> February 2020. SOAS, University of London. London, United Kingdom.

Janert, Klaus Ludwig (1977) *Nachi-Handschriften nebst Lolo- und Chungchia-Handschriften*. Teil 4. *Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland*. Wiesbaden. Franz Steiner Verlag GmBH.

———— (1980) *Nachi-Handschriften nebst Lolo-Handschriften*. Teil 5. *Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland*. Wiesbaden. Franz Steiner Verlag GmBH.

受理日 2020 年 4 月 6 日